

弓張月

西園寺隆憲

真夜中に眼がさめた。

真夜中といっても時間はわからない。眠る時に部屋中の明かりという明かりはすべて消灯して眠りにつくから時間の感覚さえわからない。テレビの待機電力を示す赤い小さな明かりでさえ、コンセントを抜いて消す。電気代を節約しているとかそういうのではなく、ただすべての明かりを消して眠りたいだけだ。

目覚まし時計がわりの携帯電話のアラームの時間まで、誰に邪魔されることなく眠りたい。できれば完全防音で窓の無い部屋で眠りたいが、一会社員の身分でそんな贅沢な家を持つことは不可能だ。カーテンから射し込む月明かりでさえ不快に感じる。シャッターなどを閉めて眠ればよいようなものだが、朝になって隙間から射し込む光が不快なのだ。暗闇の中に射し込む閃光ほど無粋なものはない。闇は闇であって光という相対的なものが入り込むことによって台無しになる。そんな無粋なもので目覚めるぐらいならば、いっそ薄闇から徐々に朝になるほうがましなのだ。

とはいえ、自然光ならまだしも、最近ではやたらに街灯が乱立している。もちろん防犯上いたしかたないのはわかるが、夜は暗いものだというのは何千年も前から、人間がこの世に現れる前から決まっていることである。動物は夜、眠るものである。それを不自然に捻じ曲げるから、夜に活動しなくてはいけなくなる。

夜の闇は魑魅魍魎の世界である。そんなものは実際には存在しない。

いや、存在しないというよりも存在する余地が現代には無い。昔も存在していたのか？昔も確実に存在していたという証は何も無い。しかし、存在する余地は多分にあったし、人々の記憶の中には完全に存在していたはずである。それが具体的にどこそこの川の上流に出た、そして捕まえた、となると嘘になる。具体的な姿を現さずに、音だけが聞こえ、人々がその現象にネーミングすることによって存在していたのだと思う。そして、何かの災いが降りかかった際にはその魔物のせいにして、やり場の無い怒りや悲しみを沈めていたのであろうと考える。幼い子供を行方不明で亡くしてしまった場合など、「神隠し」にあったという風に無理矢理納得して悲しみを紛らわせていたのだろう。

闇.....

そういえば今日は外が暗いような気がする。月が出ていないのか？だとすれば、あの神社の桜の樹は不気味な黒いオブジェと化しているのだろうか。

近づけば空を多い尽くさんばかりに張り巡らされた枝が、まるで悪魔の手のように子供の頃は怖がっていた。夕暮れまで友達と遊びまわっていた頃だ。西の地平線に限りなく太陽が接近して赤く燃え上がる時間帯、自分達の家を周りはもうほとんど暗くなっていた。しかし、その山の西

側の小高い所にある神社はまだ明るかった。いつまでも遊んでいたいという思いから、夕暮れ時になるとみんな集合していた。神社の鳥居から見下ろす自分達の町はちっぽけで暗く、そのずっと向こうの山に沈む太陽は燃え尽きてしまうのではないかと思うほど眩しかった。燃え尽きる寸前の太陽の光を受けた神社はまさしく神々しく輝いていた。普通にみれば剥がれ落ちた朱の色なども、膨大な光に照らされわからなくなり、金属で補強された箇所が強烈に光っていた。そのタイミングを逃すと、一瞬で夜の闇が訪れた。昔はわかりやすかった。街灯も小さな暗い電球がぼつぼつと申し訳程度に燈っていた。ちかちかと切れかかっているのもよくあった。

桜の大樹はその時に急に存在感を現す……

もちろん春には綺麗な花を満開に咲かせて存在感をあらわすが、夏になって青葉だけになってからも、闇の訪れと共に存在感を現す。手を広げた巨大な魔物が闇で多い尽くす手伝いをしているような、もしくは、闇から逃げ遅れた子供達をどこか異界に連れていくような、そんな錯覚に陥らせる。ちろちろと桜の大樹の根元に沸き水を溜めておく手洗いのような所の水の音もよく聞こえる。明るいあいだみんなで遊んでいる時は少しも気にならない小さな音が、やけに気になる。

ちろちろちろ.....

ざざざざざ.....

ちろちろちろ.....

ざざざざざ.....

風に戦ぐ木々の音もよく聞こえる。そして、怖くないけどと言いながら子供達は小さな明かりのある家に帰ったのだった。神社の石段も二段飛ばしぐらいで慌てながら。横たわる川にかけられた車一台でいっぱいになりそうな橋も駆け抜けて、一目散にそれぞれの家に帰った。

「暗くなる前に帰ってきなさい！」

毎日毎日そう叱られながら、テレビの前に手も洗わずに座っていた。

本殿に向かって右側にその桜の大樹は植わっている。いや、神社が造営される前からその桜はそこにあったのかも知れない。そしてちょうどその後ろから沸き水が出ていたのだろう。それを利用して手洗いにしたのだろう。神社を造営する場所に適していたのだろう。向かって左は？

本殿に向かって左側はどうなっていたんだろうか？

山.....山はもちろん神社自体が山の中腹にあるのだから、間違いない。

獣道のようなものがあったか？

何か.....

何か、あったのか？

何か.....厭な.....

はいつてはいかん.....

入ってはいけない？入ってはいけないところ？

子供達は神社の本殿ですら入って遊んでいた。もちろん鍵がかかっているのだがそれはもろい鍵で石で少し叩けば開いた。中には恭しく鏡が置いてあった、ちょうど西に太陽がくれば鏡に光が当たっていた。格子戸を通り抜けて、燃え尽きる寸前の太陽は鏡にその姿を映していた。狛犬の上に乗ったり。時には賽銭箱の中の小銭を取る工夫などもしていた、が、

はいつてはいかん！

怒られたのか？誰かに……

本殿でそれだけやりたい放題やっても、そんなに厳しく叱られた記憶は無い。

それから行かなくなったのか？

左側はどうなっていた？

春が過ぎ、梅雨が訪れようとしている季節、昼間は半そででも汗ばむ日があるのだが、夜はまだ肌寒い。生ぬるい湿度が全身を包み込む。すっと冷たい風が背筋に届く。全身の毛がぞわぞわとたつ。霊などは怖くはない。

そんなものはこの世に存在しない。魑魅魍魎もいるのであれば会ってみたい。

しかし、人間というものはそういうモノを抜きにしたところで闇や、山、異界に対する恐怖を本能的に持っているものなのだろう。昼間とは違う風景。空気の種類がまるで別のモノのように感じる。一呼吸一呼吸が深く、意識したことがないぐらいに肺に送りこまれるのがわかる。自分の息遣いだけが聞こえる。聞こえるというよりも、感じる。神社の石段の手前の川は水量が少ないのか橋の上から気配が感じられない。耳を澄ませば微かにせせらぎが聞こえるようだ。いちだんと湿度が増したような気がする。それもさっきまでの湿度、湿りとは違ってなんだか冷たくなっているようだ。山に入ればもっと冷えているのだろう。俺は橋を渡り、石段の一段目に足をかけた。石段の上に目をやってみたところで上りきった先は見えない。一段一段、上っていかなければ、神社の本殿も桜の大樹も姿を現さない。

やはり……帰るか？

何もこんな真夜中に確かめに行くことはない。

躊躇ったが、やはり止めれない。好奇心。人間は恐怖を欲するのか？怖い怖いと言いながら恐怖映画などを見たがる。厭だ厭だと言いながら、肝試しなどをやりたがる。勇気を試すというよりも本能としての好奇心が抑えられないのか？人間は大抵の欲を制御できる。腹が立ったと言って即殺人するものは少ない。好きな女性をいきなり襲うものも少ない。動物には抑制できない衝動も人間は抑制することができるが、人間だけが持つ、謂れの無い恐怖に対する好奇心は抑えられない。外国の恐怖映画などで明らかに危険な場所に軽装で突入する馬鹿な場面や、連続殺人鬼が潜むキャンプ場から早く帰ればいいのに一夜を過ごすというような馬鹿な設定があるが、それらは人間の好奇心を大げさに表現しているだけなのか？げんに俺も石段を上りきって、今、目の前には……

神社がある……

振り返ると、町が見える。町が日常。こちらが異界。異界への入り口に立つ。

今なら引き返せる。いや。確認してすぐに引き返せばいい。

肌寒い。遠くにマンションの明かりがともっている。あちらは日常……

ざざざざざ……

風が山の木々を揺らせている……

ざざざざざ……

ざざざざざ……

冷たい風が頬をなでる……

ここはな.....えらい人の.....

だから.....はいっちゃだめなんだよ.....お怒りになる
怒りに触れるんだ.....

ごめんなさい.....もう来ません

ごめんなさい.....

約束だよ

次はゆるさないからな.....

本殿に向かって歩いていくと、右側に桜の大樹が腕を広げていた。その枝越しに薄い月が出ていた。闇夜とっていたが薄い月が出ていた。雲は厚いようで、月の輪郭が見え隠れしている。雲が月を覆いつくした時は、月自体がぼんやりと淡い光になっている。地上までは届いていない。俺の足元には影がない。

ちよろちよろちよろ……

水はまだ湧き出していた……

ちよろちよろちよろ……

手を入れてみると、ちぎれそうに冷たい……

後ろを振り返れば……左側

道がある……

木々が両側から被さってくる道がある、昼なお暗い道が続いている。落ち葉が何年間も堆積して、柔らかい、ジメツとした道がある。山の奥に繋がる道。

思い出した……

叱られてはいない……

ただ

二度と

二度と来てはいけない場所。

この墓石の場所に来てはいけなかったのだ。

二つ並ぶ墓石！文字が子供の頃は読めなかったが今は読める。

明かりが少ない。文字には。文字の意味は。

「二度と来るなと言っただろ！」

突然後ろから大声と同時に首に腕を回された！

声が出ない！

足元が泥濘に取られ一緒に倒れこんだ。相手は俺に馬乗りになり俺の髪を掴んだ。

「もうゆるさない！ここに眠る方と同じようにお前の首も！」

鎌が、空いているほうの手に鎌が握られている。ひやりと喉にあてられ

「う！」

地面を探ると石があった。それで相手の頭を叩いた。

はあはあはあはあはあはあ

はあはあはあはあはあはあ

「何しやがる！そんなもの！なんともねえ！」

相手が立ち上がりかけたところをもう一撃加えた。

「う！」

はあはあはあはあはあはあ

はあはあはあはあはあはあ

何度も、何度も、何度も、何度も。その石で。

血が、その男の血が、俺に降りかかる、顔に、身体に、石を振り下ろす度に
目に入る、口に入る、髪の毛に纏わりつく、手が滑る、流れる血、男の血が。

はあはあはあはあはあはあ

はあはあはあはあはあはあ

ざざざざざ……

はあはあはあはあはあはあ

はあはあはあはあはあはあ

はあはあ……

真夜中に目が覚めた。

なんだか厭な夢を見ていたようだ。

全身が寝汗でびっしょり塗れている。春が過ぎ、もうすぐ梅雨だというのにやけに蒸し暑い。シャワーでも浴びてすっきりしなければ眠れない。眠る時は部屋中の明かりという明かりを全て消さないと眠れない。電気代の節約とかそういうのではなく。気になると眠れないのである。風呂場までは真っ暗でもたどり着ける距離だ。それにしても、ひどい寝汗だ。まるで纏わりつくようだ。風呂場の電気をつけた。鏡に映った……

俺は……

俺は血まみれだ……

鏡の中に……

血まみれの俺の後ろに……

鎌を持った血まみれの男がいる……

弓張月

<http://p.booklog.jp/book/58520>

著者：西園寺隆憲

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/onbasarataka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/58520>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/58520>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ